

3.11

その時そして

▶3388

「もう一度、甲子園」胸に

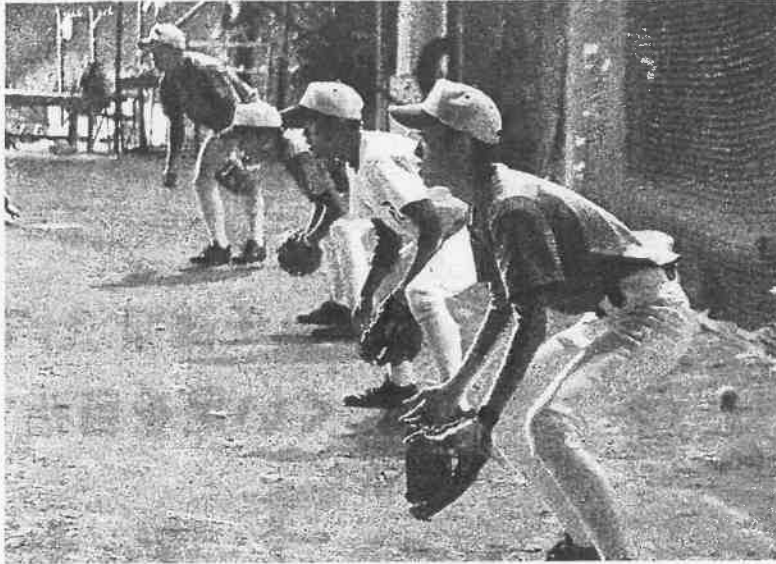
「1イニングの貸し」①

「もう1球！」

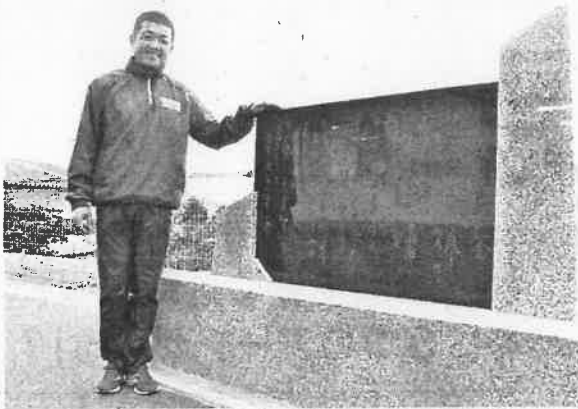
以上続いた。

10月中旬、陸前高田市にある高田高校。夕暮れのグラウンドに野球部員たちの声が響く。守備のノック練習は止まることなく1時間

球部を指導して25年。まだ



午後6時過ぎ、薄暗くなったグラウンドでノック練習が続いた＝高田高校グラウンド



「1イニングの貸し」が刻まれた石碑と伊藤新コーチ。石碑は震災後別の場所で保管され、今年8月に帰ってきた＝高田高校



津波の直撃を受け、全壊した高田高校旧校舎＝2011年4月8日、高田高校提供

果たせていないことがあった。

32年前の夏、当時2年生

の伊藤さんは甲子園のアル

プススタンドにいた。高田

高校は、このとき初出場。

だが1回戦の八回途中、あ

と1イニングを残し、降雨

コールド負けを喫した。

「きみたちは甲子園に1

イニングの貸しがある。そ

して青空と太陽の貸しもある」

試合を見て、作詞家の阿

された生徒がいた。高台に

久悠さんが詠んだ詩は石碑

に刻まれ、今は高田高校の

グラウンド脇に立つ。当初

は校舎正面にあったが津波

で被災。数日後、がれきの

中で倒れているのを野球部

OBが見つけた。

津波は校舎3階の天井ま

で達した。学校内外にいた

生徒22人、教員1人が犠牲

になった。野球部でも家族

を亡くした生徒や、家が流

された生徒がいた。高台に

あって被災を免れたグラウ

ンドには、仮設住宅が立ち

並んだ。

4月末、野球部は練習を

再開。他校のグラウンドを

借りて転々としながらも野

球を続けた。練習を終えて

帰っても、仮設住宅では洗

濯機が共用だったため自由

に使えない。練習に招待し

てくれた学校が洗濯機を貸

してくれ、そこでユニフォ

ームを洗って帰ることもあ

それから9年。コロナ禍で甲子園の舞台が消えた今年の夏、後輩たちは25年ぶりに県大会でベスト4に進出した。準決勝では、この大会で優勝した一関学院を相手に、敗れはしたものの延長13回タイブレークに持ち込む粘りを見せた。大会中、試合後のインタビューで平沢雄太郎主将18ら選手たちは「地元を元気づけようと野球をしている」と話した。

◆ コーチとしてスタンドから試合を見守った伊藤さんは「今の子ども、周りの大人から甲子園のことを聞いて入ってきている。今年のチームも『もう一度、甲子園へ』という強い気持ちを持った子が多かった」と振り返る。伊藤さんは今でも、甲子園初出場が決まったときの地元の熱狂を覚えている。

◆ 野球で地域に喜びと感動を届ける――。高田高校野球部がめざす野球は、どう受け継がれてきたのか。「1イニングの貸し」からたどった。(中山直樹)

甲子園出場に地元は歓喜

朝日 2020.10.27

1988年7月26日、高田高校は岩手大会決勝で釜石工に勝利し、初の甲子園出場を決めた。当時2年生部員だった伊藤新さん(49)が驚いたのは、盛岡市の県営野球場から、地元の高田に帰った時だった。

「見たことがないほど、街がこうこうと輝いていた」。夜のはずなのに、陸前高田駅周辺には多くの人や車が集まり、選手の帰還を待っていた。バスが止まり選手たちが降りると、大きな歓声が上がった。選手たちはそのまま、どこから借りてきたのか金や銀のテープで飾られた屋根のない車に乗せられ、パレードが始まった。花火が上がリ、紙吹雪が舞い、太鼓が鳴った。約5千人が集まり、健闘をたたえる声は夜中まで続いたという。

甲子園出場にあたり、学校への寄付は3億円以上集まった。「野球ひとつで街はこんなにも盛り上がるのか」。伊藤さんは衝撃を受けた。グラウンドには連日、地元住民が様子を見に訪れた。選手たちの練習にも熱が入り、万全の状態です。甲子園初戦に向かっていた。



九回裏、釜石工の最後の打者を遊ゴロに打ち取り、マウンドの藤原投手にかけ寄る高田の選手。1988年7月26日、県営野球場

(中山直樹)

甲子園の重圧一雨にも苦戦

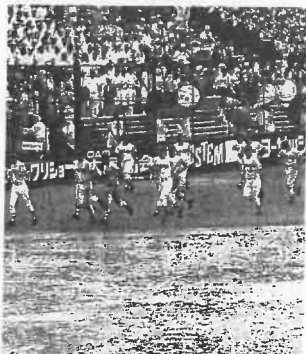
1988年8月10日。初めて甲子園に出場した高田高校の初戦の相手は、滝川第二高校（兵庫）だった。陸前高田市から何台ものバスで、生徒やOB、地元住民ら約2千人が応援に駆けつけた。

先制したのは高田。初回、1、2番の連続ヒットで1点を奪うと、スタンドから大歓声が上がった。2年生部員だった伊藤新さん（49）も「これはいけるんじゃないか」と期待した。

だが、試合開始直後から小雨が降り始め、エースの制球が定まらない。逆転され、八回表が終わった時点で5点差をつけられていた。「チームで一番うまくいったショートの手が何度もエラーをしているのを見て、やっぱり甲子園の重圧はあるのかなと思った」と伊藤さんは振り返る。

八回裏、滝川二の攻撃が始まるころには雨は土砂降りになっていた。グラウンドは湖のようになり、ボールは弾まない。滝川二の打者のバットが雨で手からすり抜け、大きく飛んでいった。それを見た審判らが試合中断を宣言した。八回裏2死、3-9で降雨コールド。高田高校の初めての甲子園は終わった。

（中山直樹）



滝川二との試合後、応援席にあいさつして引き上げる高田の選手たち＝1988年8月10日、阪神甲子園球場

阿久悠さんの詩が石碑に

高田高校にとって初出場の甲子園は、8回降雨コールド負けで終わった。夏の甲子園大会では1932年以來の降雨コールドゲーム。作詞家の阿久悠さんは「きみたちは甲子園に1イニングの貸しがある」と詩に詠んだ。その詩は石碑となり、年末には学校の正面に建てられた。

甲子園で先輩たちの姿を目に焼き付けた伊藤新さん(49)は翌年、3年生になった。「先輩たちより力が劣っているのはわかっていて」。だから、もうこれ以上できないというほど練習した自負がある。でも、最後の夏は県大会準々決勝で敗退。「ああ、やっぱり甲子園は遠いんだなと思いついた」

卒業後は大船渡の会社に就職した。野球はもうやめようと思ったが、仕事終わりには野球部の練習を手伝いに母校へ向かっていた。

「伊藤みたいなやつがコーチをやってくれと助かるんだけどな」。あるときふと、当時の三浦宗監督に言われた。理由は言われなかったが、けがや控えも経験した自分だから、広い視野でチームを見られるということなのかなと思った。なにより、もう一度高田を甲子園に、という思いが消えなかった。

1995年、伊藤さんは母校の職員に転職。野球部のコーチになった。

(中山直樹)

1イニングの貸し⑤

地震グラウンドに地割れ

2011年3月11日、陸前高田市にある高田高校は午前中で授業が終わった。午後2時46分、野球部員たちがグラウンドで練習をしていると、立ってられないほどの大きな揺れがきた。

長い揺れが収まると、グラウンドに幅約5m、長さ数分の地割れがいくつも広がっていた。一体、何が起きているのか……。当時の主将、大和田将人さん(27)は混乱しながらも、坂の下の校舎にいるコーチや監督を呼びに走った。

コーチの伊藤新さん(49)は校舎で仕事をしていた。しばらくすると、津波警報を知らせる放送が流れ、校舎に集まった生徒たちは高台にあるグラウンドへ避難した。

津波が町をのみ込み、校舎に直撃するのを伊藤さんはグラウンドの端から見た。何度か波がきたあと、呆然としていてと徐々に日が暮れ、辺りは暗くなった。

グラウンドに避難した生徒や近隣住民ら約500人はその夜、野球部の室内練習場に泊まった。野球部員約40人は、練習場にあったベンチコートなどの防寒具や、練習後に食べるために炊いてあったご飯を配った。

(中山直樹)

校舎・グラウンドも使えず

1 イニングの貸し ⑥

高田高校の校舎は3階まで津波にのまれた。高台にあるグラウンドに避難し、野球部の室内練習場で夜を明かした職員や部員たちは翌日、グラウンドに白線で「SOS」と書いた。「携帯電話もつながらず、道路も寸断されていた。ここにも人がいるってことを誰かに伝えなかった」。当時の主将、大和田将人さん(27)は振り返る。陸前高田市の職員が来て、避難していた人の数や名前を確認したのは、その数日後だった。

保護者が迎えに来た生徒もいて、野球部員は一度散り散りに。再び集合したのは3月末だった。2年生9人、1年生32人の部員はほぼ全員が集まった。当時の監督と伊藤新コーチ(49)は一人ひとりと面談し、被害状況を確認した。家を流された生徒、親を失った生徒がいた。伊藤さんも自宅が全壊していた。

面談を待つ間、部員がグラウンドでキャッチボールをしていると、市の職員が来て測量を始めた。仮設住宅を建てるためだった。大和田さんは「校舎も壊れ、グラウンドも使えなくなってしまうのか」と言いようのない気持ちになった。それから1カ月半、野球部が活動することはなかった。

4月末、奥州市にある水沢工業高校から監督に連絡があった。「うちのグラウンドを貸すので、寝泊まりして合宿をしませんか」

(中山直樹)

チーム全員で来たかった

震災後、グラウンドに仮設住宅が建った高田高校。練習場所のない野球部に、県内の高校から練習や合宿の誘いが相次いだ。北上、九戸、盛岡。部員たちはバスに乗り込み、転々としながら練習を続けた。

当時の主将、大和田将人さん(27)は「部員たちにも野球をしいのかという葛藤があった」という。親を亡くした部員もいた。地元にはまだがれきが残っていて、仮設住宅では食事や風呂も十分ではなかった。「今だから思うけれど、野球をやっている間は余計なことを考えずに済んだ。そういう時間に飢えていたのかもしれない」

2011年夏、高田高校は岩手大会に出場したが初戦で敗退した。大会が終わった7月末、日本高校野球連盟から連絡があった。「被災地の高校代表として行進しませんか」。甲子園大会の開会式に主将を招待する内容だった。



8月6日、大和田さんは甲子園のグラウンドを「がんばろう！ 日本」と書かれた横断幕を持って歩いた。他の被災地の球児も一緒だった。聞いたことのないほどの歓声。「がんばれ！」とスタンドから声が聞こえた。歩きながら、全国から野球道具やメッセージが届いたことを思い出していた。「岩手代表としてチーム全員で来たかったなあ」

開会式で横断幕を掲げる大和田将人さん(左端) 2011年8月6日、阪神甲子園球場

(中山直樹)

自分たちで歴史をつくる

2020.11.2
朝日

高田高校のグラウンドから仮設住宅が全て撤去されたのは2019年春だった。それまで約8年間、野球部員は放課後にバスで30分ほどかけ、陸前高田市から大船渡市内のグラウンドまで移動して練習した。

学校のグラウンドが使えるようになって2年目の今年、夏の県大会で25年ぶりにベスト4に進んだ。主将を務めた平沢雄大郎さん(18)が高田高校を意識し始めたのは小さい頃。テレビで甲子園の試合を見ていた時、「近くの高田高校も昔、甲子園に出たことがあるんだぞ」と父親が教えてくれた。

震災で大船渡の自宅が流され、住田町に引っ越した。中学生の時は内陸の強豪シニアチームに所属していたが、高田高校のことがずっと気になっていた。

校舎が全壊し、グラウンドは使えない。それでも高田高校への進学を決めたのは、「そんな学校が甲子園にもう一度いったら、大きなインパクトを残せる」と思ったから。練習場所が遠いことも「時間が限られているからこそ、練習の質を上げられる」とプラスに考えた。「自分たちで歴史をつくる」。その夢は、コロナ禍で行き場を失った。

(中山直樹)

夏の甲子園中止決定に涙

今年5月20日、コロナ禍で夏の全国高校野球選手権大会の中止が決まった。練習後に佐々木雄洋監督(39)から伝えられると、3年生の多くは涙をこらえきれなかった。

「やってきたことを、どこにぶつけなければいいのか」。エースの佐藤真尋さん(18)はわからなくなった。陸前高田で育ち、祖父も父も元高校球児。「1イニングの貸し」があることも小学生の頃から知っていた。中学3年で投手に転向すると急成長した。内陸の学校からも声がかかったが、高田高校を選んだ。冬場は投げ込みや実践練習を繰り返し、練習試合でも他県の強豪と対等に戦えるようになって、自信を深めてきたところだった。

平沢雄大郎主将(18)も心が折れかけた。甲子園に行きたくて高田に入ったはずが、目標を奪われた。「それぞれが中止の結果を受け止めて考える」と佐々木監督は言った。家に帰って思いを巡らせた。

なぜ、甲子園に行きたかったのか。「自分のためでもあるけれど、チームで3年間共有してきたのは『地域を盛り上げる』ことだった。(県で独自の)大会があるなら、まだそれは達成できるんじゃないか」(中山直樹)

野球が地域を盛り上げる

7月13日、新型コロナウイルスの影響で中止になった岩手大会に代わる独自の県大会が開幕した。高田高校は勝ち上がり、25年ぶりのベスト4に進んだ。

大会が進むにつれ、平沢雄大郎主将(18)はチームだけでなく、地域の熱が上がっていくのを感じた。同級生はもちろん、学校近くの定食屋さん、近所の野球ファンからも「がんばってるね」「優勝しろよ」と声をかけられた。「高校野球が本当に地域を盛り上げることができると実感した。」

準決勝の一関学院戦は両チーム一歩も譲らず、延長十二回を終えても決着がつかなかった。タイブレークに入った十三回裏、佐藤真尋投手(18)が相手の4番打者に投じたこの日の124球目は、少し甘く入った。打球はセンターの頭上を越えサヨナラ打となった。3-1で試合終了。一関学院は勢いに乗り、この大会で優勝した。

あの試合から約3カ月。佐藤投手は街を歩くと、いまだに「ナイスピッチングだった」と声をかけられる。「勝てた試合だったという悔しさは残る。でも、自分たちが掲げた

『ふるさとに勇気と感動を届ける』という目標を少し達成できたかな」と思っている。



準決勝で力投する佐藤真尋投手
7月23日、県営野球場

(中山直樹)

30年の思い 念願の赴任

1イニングの貸し ⑪

▶3398

3・11 その時 そして

今年、夏の県大会で25年ぶりにベスト4に進んだ高田高校野球部。就任3年目の佐々木雄洋監督(39)も32年前の夏、甲子園で高田の試合を見ていた。野球部OBの父も一緒だった。当時小学1年の佐々木さんは土砂降りのなか、降雨コールドで終わった試合に「悔しい」と強く思ったのを覚えている。

その年の夏休み、父の実家がある陸前高田市で過ごしていた。甲子園出場に街が盛り上がり、地元の人たちが高田高校の野球帽をかぶっていた。高校野球が持つ力を幼いながら感じた。小学生のときに野球を始めた佐々木さんも、甲子園での高田の試合は録画したビデオテープがすり切れるまで何度も見た。

盛岡の高校でも野球を続け、大学卒業後に高校の体育教師になった。「ゆくゆくは高田で野球部の監督に」と思い描いていた。大槌高校で勤務していたときに震災が起きた。高校野球が地域の力になれるのではないか。32年前の陸前高田の光景が頭に浮かんだ。大槌高校と、その後赴任した久慈高校でも野球部監督を務め、2018年に念願だった高田高校への赴任が決まった。



佐々木雄洋監督

ところが、高田の野球部員たちは佐々木さんが思っていたほど、「1イニングの貸し」や「地域」に強い思い入れがないように見えた。「おいおい、俺が30年も思い続けたものは、こんなもんだったのか」
(中山直樹)

目の前の1球に集中する

2018年、佐々木雄洋さん(39)は念願だった高田高校野球部の監督になった。まず選手たちに伝えたのは、「野球には町おこしの力がある」ということだった。

32年前に高田が甲子園に初出場したときの地元の盛り上がり。17年に久慈高校を率いて岩手大会決勝まで進んだときに、「復興に向かうなかで元気をもらった」と地元の人からたくさん声をかけられたこと。そういった経験を何度も話した。選手たちは小さいときから、震災からの復興に取り組む地域の人を見てきた。きつと伝わるだろうと考えた。

一方で、選手が「地域のために」「1イニングの貸し」という言葉に酔いしれないようにも気をつけた。「自分もそうなりかけたことがあるからわかる。きれいな言葉を意識しすぎて、自分の力を過信したり、練習に気持ちが入らなくなったり」と笑う。まずは目の前の1球に集中し、練習で自分ができることをやりきる。その先に大きな目標として「地域」を見据えられるチームを目指した。

今年、夏の大会が始まる頃には、佐々木監督があえて練習中に「地域のために」と言うことはなくなった。選手たちは全力で練習に打ち込み、自分たちから口にするようになっていた。目の前のことと、大きな目標とのバランスが取れるようになっていいると思った。「ああ、強くなったな」と実感した。

(中山直樹)

1イニングの貸し

⑬

50年以上、高田高校野球部を見守ってきた人もいる。野球部OBの佐々木正幸さん(71)は「夏の岩手大会で、観戦しなかった高田の試合はほとんどない。ただの高田ファンだ」と笑う。高校卒業後も、陸前高田市役所に勤めながら、仕事の後や休日には時間があるとグラウンドに向かい、練習を手伝った。退職した今も時折、様子を見に行く。



佐々木正幸さん

1988年に高田が甲子園に初出場すると、OB会員として寄付集めに奔走した。試合前日には臨時列車が出て、地元に応援団が乗り込んだ。「大宮駅で一時停車

50年以上 球児から見守る

中、ホームで応援歌を歌って怒られたりしたんだ」と懐かしそうに話す。

震災のとき、高田高校の旧校舎の近くにあった自宅は津波で流された。仮設住宅で暮らしながら観戦に行った、2013年夏の岩手大会1回戦を鮮明に覚えている。

高田は震災後初めて、夏の大会で勝利を挙げた。「周りのOBと抱き合って喜んだ。ああ、高校野球はいいなあ」と涙が出てきた。

2年前に家を再建した。建てた場所はまた高田高校のすぐ近くだ。近所で野球部の生徒を見かけると「がんばれよ」と声をかける。今夏のベスト4進出は、近所の人たちの間で何日も話題に上った。「『地元のために』と選手は言ってくれるけれど、そんなのどっぴんになっただけよ」

(中山直樹)

3・11 その時 そして ▶3401

1イニングの貸し ⑭



保育所で野球の楽しさを伝える高田高校の野球部員たち。2019年3月15日、陸前高田市、高田高校提供

「ボールはこうやって投げ
るんだよ」「バットを振って
みよう」。今年1月8日、陸
前高田市の小友保育所に高田
高校の野球部員が訪れた。昨

町に再び喜びを思い継ぐ

年から年に1回、地元の保育所で開いている野球教室だ。野球部員の数が年々減るなか、野球や高田高校に早くから親しんでもらおうという取り組みだ。3年の佐藤真尋さん(18)は「『1イニングの貸し』を取り返すには選手層の厚さも必要。地元からなるべく高田高校に入ってもらえるよう子どもたちにもアピールしたい」と未来を見据える。

この夏、エースとして活躍した佐藤さんは現在、大学受験に向けて勉強中だ。ゆくゆくはプロ野球選手になりたいと考えている。「甲子園には行けなかったけれど、高田高出身で初のプロという歴史をつくって、恩返しをしたい」という。

2011年に主将を務めた大和田将人さん(27)は、10月から大船渡の建設会社で働き始めた。卒業後、千葉県の建設会社で働いていたが、地元の近くに帰りたい気持ちが強くなったという。「震災後、野球をするなかでたくさんの方の支援を受けた」。街の道路や橋を自分の手でつくり、復興に携わりたいと考えている。

コーチに就任して25年。伊藤新さん(49)は、夕暮れのグラウンドで部員たちが練習する様子を見ながらつぶやいた。「やっぱり、もう一度、甲子園にいかなきゃいけない学校なんです」

32年前、高田高校野球部の初舞台は土砂降りのなか8回コールドで終わった。甲子園に残してきた「1イニングの貸し」は、震災で多くを失い傷ついた町に、再び喜びを届けたいという思いを乗せて受け継がれている。

(中山直樹 ⑭の項終わり)